

あれまごの あらすじ

アングレカム寮より山頂へ向かい数百メートル。森深く分け行った場所にある、学生寮旧棟。別名「隔離棟」

築百年は越えようかというその木造平屋に運ばれてきた者があった。

「まったく、ついてねえ」

「数年ぶりだよ。私も足を踏み入れたのは」

療養所時代の名残、病院から受け入れた生徒たちを感染症から守るために用意されていた場所。

「君なら退屈せずに乗り切るだろうよ」

大量の書籍とともに、八重垣えりかが運ばれてきたのは2週間前のこと。

「規則だからね、仕方ない。」

身の回りのことは、心配しなくていい。そのための場所だからね」

考崎千鳥を得てから、すっかり疎遠になっていた教員たちとの日々を過ごし、八重垣えりかは復学した。

それからほどなく。

